京都　高瀬川周辺散歩

22-06-29　37 回　竹本　修文

1．はじめに

京都に関しては、2019 年に**伏見**を散策して、**十石舟・三十石船の旅**の表題で KPC に今年 1 月に投稿し、瀬戸内海から京都への海運ルートの中継地としての伏見の重要さに触れ、伏見で物資を小さな**高瀬舟**に積み替えて、高瀬川に入り京都中心部に配送する水運システムを報告した。また伏見は**寺田屋**があり**龍馬とお龍の銅像**や**龍馬通り商店街**などを紹介し、更に筆者が住む横浜市の神奈川宿跡を**神奈川の宿・田中家**の表題でお龍が働いたと言われている田中家の事も紹介した。今年は、高瀬舟が物資を配送した京都五条から二条の間の高瀬川とその周辺を 6 月に散策したので、報告する。今回もまた、龍馬とお龍が登場する。

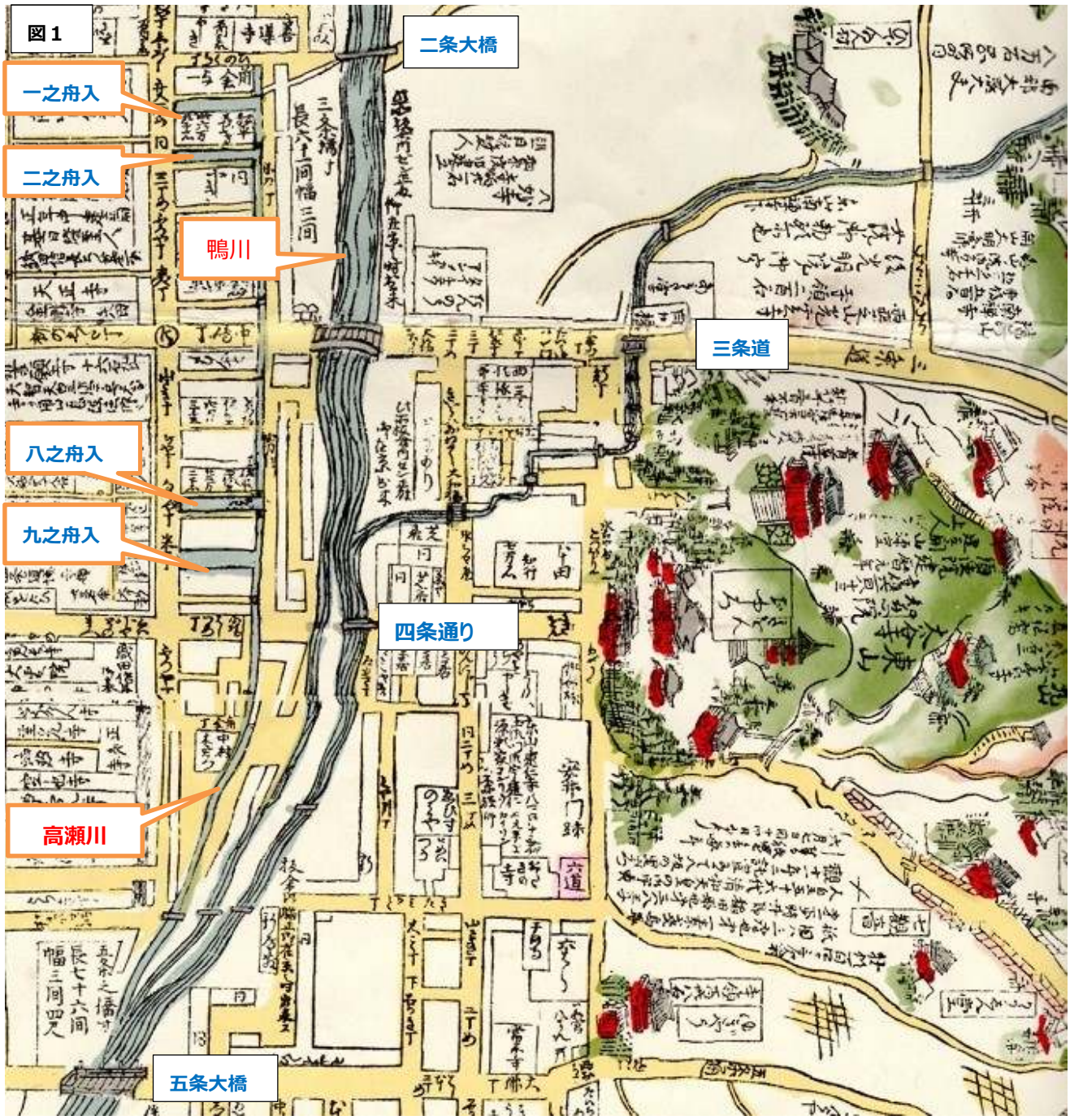
図 1．は鴨川と高瀬川の絵図で出典は**元禄九年京都大絵図**である。

① 現在の国道 1 号は五条大橋を通って大阪・淀屋橋までだが、当時の東海道は都の**三条大橋**が終点だった。

② 鴨川は江戸時代にはいくつかの川の束だった。

③ 伏見から新高瀬川を北上し、鴨川を横切って高瀬川となり、唯一現存する**一之舟入**がある二条付近までだった。

④ 高瀬舟の積み下ろしと方向転換用に 9 か所の**舟入**が作られた。「七之舟入跡」近くに土佐藩邸跡の標識がある。



制作：竹本　修文

2．**角倉了以**（すみのくらりょうい）

高瀬川は運河であり、角倉了以とその子**玄之**（はるゆき）の工事である。彼は生粋の京都人でその子孫は明治の 11 代まで京都の豪家を守っている。角倉了以は土木事業家として優れた技術と先見の明を持った人物であり、算数地理を研究し、海外貿易に着目した。1603 年から 10 年間、東南アジアに角倉船という朱印船をもって貿易を行い、巨大な利益を得た。1606 年に保津川の岩石を砕いて船を通す工事に成功し、後には富士川や天竜川の工事も行っている。こうした土木事業の功と大坂の陣に**徳川氏**につくした功とによって、角倉家は近江の国の代官に任ぜられた。鴨川・淀川の過書船（京阪間交通のために淀川の通航を特許された船）の支配、淀川・桂川通いの船の運上金を与えられて大いに繁栄した。了以は美作で和計川に浮かぶ**高瀬舟**と呼ばれる、船底の浅い船を見て大いに感心し、同じ船を使って、保津川を上り下りして、丹波の物資が京に運ばれ、京からは米や塩が丹波に運ばれて国内物資の流通が盛んになった。

図２．

西木屋町通り備前島町の立誠小学校跡に 2017 年に建設されたモダンなホテルの玄関に立つ角倉了以のモニュメント

3．高瀬川周辺　その１（四条から三条に向かって北上）

制作：竹本　修文

高瀬川　第７～９の舟入跡の標識

下図の高瀬川西側（左）に舟入７、８、９があった。

制作：竹本　修文

4. 高瀬川周辺　その２（四条から三条に向かって更に北上）　この地図は右が北　（出典：京都散歩　成美堂出版）

図４

①　土佐藩邸跡

② **京都龍馬会**　坂本龍馬を通して幕末の人物・風土を学び、自由闊達な精神を愛する人たちとの交流により、龍馬ゆかりの地のまちづくりの推進を図り、歴史的景観の保全と文化の振興に寄与することを目的としている。

坂本龍馬やその仲間たちが駆け抜けた幕末激動の中心地 京都木屋町。「龍馬」は高瀬川沿い木屋町通の土佐藩邸跡と酢屋のほぼ中間、「坂本龍馬妻お龍独身時代寓居跡」石碑前 都会館の一階にあります。
お酒の呑める坂本龍馬情報交差点。

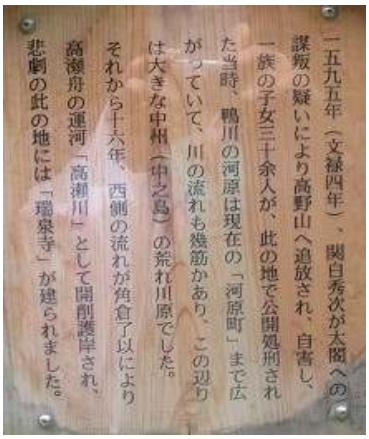
スナック龍馬

お龍の寓居跡

制作：竹本　修文

③　瑞泉寺

三条大橋の西端と高瀬川の間にある瑞泉寺は筆者が若い頃に怖いもの見たさに数回訪ねた寺で、他の観光客に出会った事は一度も無い。今回も妻と別行動で夜と昼の２回訪問した。今では内陸にあるが、鴨川が自由勝手に流れていた頃は、川の中州であり、処刑が行われていた所である。 豊臣秀吉には養子・秀次がいたが待望の実子秀頼が生まれたために秀次とその家族が邪魔になり、秀次は謀反の罪で自害させられ、妻妾と幼児 29 人が秀吉の命令で、この中州で河原者の手で首をはねられた。死刑執行の奉行は石田三成、増田長盛らであった。秀次の妻妾の死体は一か所に集められ秀次悪逆塚と書いた石塔が建てられたが、妻妾の中には母娘で同じ秀次の妾であった者が二組あるので、京の人は「畜生塚」と呼んだ。角倉了以はこの地の開発時に哀れみ、寺を創建した。



④　三条大橋とみそそぎ川

図４．に「**みそそぎ川**」が出て来たので、高瀬川の起点の説明をする。適当な地図がなく、文章での説明をお許し願う。丸太町橋と二条大橋の中間点、琵琶湖疎水が蹴上から鴨川に合流する大きな船溜まりがある付近の西岸から鴨川と並行して図４の「みそそぎ川」が始まる。二条大橋の北側のレストラン・**がんこ 高瀬川二条苑**の中の庭園に取水口があ

り、みそそぎ川から取水して、**一之舟入**近くで高瀬川に注いでいる。最近の NHK **ブラタモリ**で詳しい説明があった。
三条大橋は天正 18 年（1590） に豊臣秀吉が改修したもので、、長さ約 100m、**橋脚は石で出来ていた。**
日本橋を起点に始まる東海道五十三次は大津から山科、蹴上をとおり、三条大橋が終点であった。三条大橋西端から河原に降りる所に、図 5. の東海道五十三次の終点の碑がある。江戸から京まで約 500 ㎞、約 2 週間の旅であった。
図 6. は 18 世紀末に出版された「都名所図会」の三条大橋だが，橋脚の保護のために，河床一面が敷石で固められている。徳川幕府は維持管理してきたが、二百数十年間で 20 回を越える洪水被害を受け，その一部が流出した。
当時の三条大橋の工事や入札の記録によると，17 世紀半ばから幕末にかけて 35 回の改修工事が行われている。

図 5

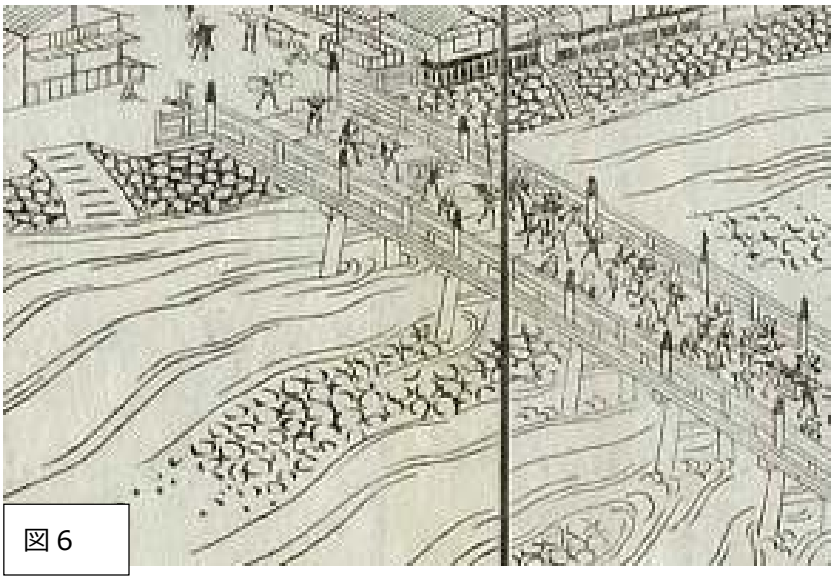


図 6

図 6. には、みそそぎ川がないが、現在は下の写真のように小さな、みそそぎ川がある。下流の納涼床の下をながすためである。三条大橋から四条側西岸の沿ったみそそぎ川である。

図 7. みそそご川の橋から北方に向き、三条大橋を撮る

制作：竹本 修文

日本最初の石柱橋

三条大橋西詰に「旧三条大橋の石柱」という立て札があり以下の記載がある高欄に付けられた擬宝珠には、天正 18 年豊臣秀吉が命じて、初めての石柱橋として架けられた。津国御影と書かれている事から、神戸市東灘区から切り出された花崗岩製であることが分かる。現在の橋の下流側に当時の石柱が残っている。図７．は橋の下流側から撮ったもので、**当初の石柱**が見える

図８は、広重の 55 枚の絵を思い出して、岡崎と京都に橋が描かれているので、「もしかして、石柱が描かれているかもしれない」と、期待したが、石柱ではなくて木材のように見える。それで、没にしようかと思ったが、三条大橋は東海道の終点だから、残そうと思って入れた。55 枚を纏めて販売した時の袋（添付写真 2 枚）をよく見ると、「真景　東海道五十三駅　続画　保永堂　一立斎広重」ともう一枚には「広重画　東海道五十三駅　続画　保永堂　はん　竹内孫八」とある。

図８．「東海道五拾三次大尾　京師」歌川広重画　天保四年頃

以上

制作：竹本　修文